

社会的包摂策変容の可能性

——「ビッグイシュー」を事例として——

八 鍬 加容子

1 本稿の目的

社会学においては、近年特に「ホームレス問題」と「社会的排除／包摂論」とを接続した議論が充実してきている一方で、ルース・リスターが「社会的包摂という概念は、社会的排除と同じくらい異論も多い」（Lister 2004=2011）と指摘する通り、「社会的排除／包摂論」のもつ問題点も浮き彫りになってきている。都市社会は、「産業社会の発展に寄与するか否か」によって人を線引きし、そうでない人を「排除」してきた（青木 2010）わけだが、「包摂策」は排除した世界に排除された人を「矯正」や「治療」をして戻す策であることが多く、包摂策にはいつも「包摂する側」の論理が展開されている。

そのような中、2003年に「ホームレスの人の仕事をつくり自立を応援する」ことを掲げた『ビッグイシュー日本版』が創刊された。『ビッグイシュー日本版』とは、ホームレス状態の人々に雑誌販売の仕事を提供するメディアのことで、このような「ストリート・マガジン」は現在約35カ国に100紙・誌程度存在する。（なお、以降雑誌を指すときは『ビッグイシュー日本版』、組織または一般的な活動を指すときは「ビッグイシュー」と表記することにする）。

そして、2003年から現在までの16年余にわたる活動の中で、「ビッグイシュー」における包摂のあり方が変遷を遂げている。包摂策は、対象者に「適応」か「逃亡」かの二者択一を迫ることが多いわけだが、「ビッグイシュー」においては対象者の日常的実践に対応するかのよう「包摂策の方が変容する」という第3の道が開かれている。

それは、いかにして可能になったのであろうか。それを解明するのが本稿の目的である。そのためにもまず2章では、「社会的排除／包摂論」の先行研究をまとめ、本稿の位置づけを再度確認する。その後3章において、日本におけるホームレスの人々の包摂策である、2002年8月に公布・施行された「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法（以下、自立支援法）」に関する先行研究をレビューする。

4章においては、「ビッグイシュー」における包摂策の変遷を捉えるために『ビッグイシュー日本版』の誌面分析により、同誌で自立がどのように語られてきたかを追う。というのも、「ビッグイシュー」は「ホームレスの人の仕事をつくり自立を応援する」ことを社是としており、「自立」の変遷をたどることにより、組織で展開されている包摂策の変容も捉えることができると考えられるからである。それとともに、2003年の創刊から現在までの16年余の間に「ビッグイシュー」という組織のあり方がどのように変わってきたかを、同社資料などを元に確認する。

続く5章においては、当初の包摂策からは「逸脱」しながらも「ビッグイシュー」に留まることで、結果的に組織の包摂策に変容をもたらした3人の販売者の日常的実践に着目し、分析する。

6章においては、1～5章の振り返りを行なった後に、データの分析をし、結論を述べたい。

2 「社会的排除／包摂論」をめぐって

岩田正美によると、社会的排除という言葉はフランスで生まれたという。戦後復興と福祉国家の諸制度が達成されながらも、そこから排除されている人々の存在が指摘され、『排除された人々 10人に1人のフランス人』(Lenoir 1974)や『富める国の貧困 社会的公正とは何か』(Stoleru 1974=1981)などが相次いで刊行された(岩田2008)。

その後、1980年代に入りヨーロッパ諸国で若者の失業問題が深刻化すると、フランス生まれの「排除と参入」は、EUで「社会的排除」「社会的包摂」という対語に変化し、次第に加盟国の社会政策のキーコンセプトになっていく(中村2002)。

その波は日本の政策の現場にも押し寄せ、民主党政権下の2011年に「一人ひとりを包摂する社会」特命チーム、またその実働部隊として社会的推進室が内閣官房に設置され、湯浅誠氏が室長を務めた。

この「社会的排除／包摂論」は社会学の領域においても、多くの議論を巻き起こしているが、そのうちの1つが先に述べた包摂策における権力の問題であろう。ジャック・ヤングは、既存の労働市場は安定した生活をもたらさない排除的な空間であると指摘し、社会的包摂がこのような労働市場への動員をかけ、人々を飲み込みながら排除する「排除型社会」をつくりだすと批判した(Young 1999=2007)。同様に、ビル・ジョーダンやルース・リスターも社会的包摂の考え方は既存の労働市場や社会への人々の参加を強制すると批判する(Jordan 1998; Lister 2000)。

一方、樋口明彦は「社会的包摂のあり方は経済的側面に限定された単層的なものではありえず、社会的・文化的側面を含めた複層的な構造を持つものでなければならない」と指摘し、「経済的側面」とともに、社会的ネットワークの構築に関わる「社会的側面」、アイデンティティの支援に関わる「文化的側面」、シティズンシップの確立に関わる「政治的側面」の4層を検討している（樋口 2004）。本稿においては、結論部分の6章において樋口のこの枠組みを用いて考察を深めたい。

社会的排除／包摂の現場を人類学的に捉えようとする試みもある。内藤直樹は、「社会的排除／包摂」をめぐって、いかなる「排除」が、どのように構築されるのかを検討するだけでなく、「排除された者」がいかなる「包摂」の対象として、どのように特定され、それに向けてどのような働きかけが設計・組織化・実行されているか、さらにそれに対して「排除／包摂」された者がいかに応答しながら生の場が構築されているのかを検討することが重要であると述べている（内藤 2014）。

そこで本稿では、「ビッグイシュー」という場において、どのような包摂策が展開され、変遷を遂げ、その変化にホームレス状態にある『ビッグイシュー日本版』販売者はどのように応答したのかを追っていく。また逆に、販売者の日常的実践がいかに包摂策に影響を与えてきたかも捉えたい。

「ビッグイシュー」を取り上げる前に、次章ではまず、日本でホームレスの人々への包摂策がどのように展開されてきたのかを確認する。

3 「自立支援法」の論点

日本におけるホームレスの人々の包摂策は、2002年8月に公布・施行された「自立支援法」とそれに基づいて作成された「ホームレスの自立の支援等に関する基本方針」（以下、「基本方針」）に沿って行われている。「自立支援法」は、当初10年間の時限立法だったが、2012年に5年間の延長が決定。2017年には第193回国会において10年間の延長が決定している。

これを受け、ホームレスの人々の多い自治体には自立支援センターが設置され、就労自立支援を軸に据えた包摂策が展開されている。なお、「自立支援法」においては、「ホームレス」は「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」（第2条）と定められており、いわゆる野宿者のことを指す。一方で、ネットカフェ難民などの出現により、「ホームレス状態の人々が多様化・非顕在化している」（堤 2010）ことも指摘されている。そこで本稿では以降、野宿者とともにネットカフェ難民な

ど広義のホームレス状態を生きる人々も含めて「ホームレス」という語を用いる。

「自立支援法」に関しては、多くの先行研究が蓄積されているが、以下の2点が主に論じられている。まず、堤圭史郎（2010）が指摘するように、「労働による自立」という価値に立脚し制度化された自立支援センターは、「努力をめぐる競争」をさせ、きわどくも包摂可能か、もしくは排除すべき対象かを識別するための選別の機制として働く。

そして、山田壮志郎（2003）が指摘するように、「就労による自立」一辺倒では、「そもそも、高齢や傷病などの何らかの理由で労働市場から退出を余儀なくされた人々を、そこへ再び戻していく」こととなり、「自ずと一定の限界がある」。

これらの先行研究が示すように、「包摂策」をうたっても、そこではホームレスの人々を排除してきた社会構造と同じ能力主義的なルールが展開されており、包摂策のルールにうまく乗れなかった人々はさらに「落伍者」というレッテルを貼られて排除されてしまう点が、1つ目の論点として挙げられる。

2つ目に、自立支援策においては、野宿者がこれまで生活基盤を築いてきた路上からの脱却が求められるという点である。阿部彩（2009）は、もし自立支援センターに入所することによって、路上生活において蓄積された資産を失うのであれば、仮に入所が就労や福祉に結びつかずに再路上化してしまった際には、その野宿者は以前よりも路上生活が厳しくなるはずであると指摘する。阿部もこの論文にて引用しているが、鈴木亘（2008）は経済モデルを用いて、自立支援センターに入所するかどうかの意思決定に関して論じている。つまり、入所した際の総価値は、路上で得られる賃金（廃品回収などから）と入所後就労退所した場合に得られる賃金と就労できる確率、そして「自立するための費用」にて決定されるという。最後の「自立するための費用」には敷金・礼金などを含む住宅費、借金の返済などのほか、自立支援センター入所時に失う資産（諸荷物、テント、テントを置いていた場所の価値等）や犬などの動物や同居家族、自由な生活時間等も含まれる。つまり自立支援策にのらず路上生活を続けるのは、彼らなりに「合理的」に選択した結果なのである。

平川茂（2004）はまた、本人が野宿生活を続けたいと願っているならば、野宿しながらも自立支援センターを利用できるような施策の必要性を訴え、「見守りの支援」と呼んでいる。

つまり、2点目の論点としては、自立支援策においては「脱路上」が「自立」の第一原則になっているわけだが、野宿生活を続けたいという人たちにその「自立」の道筋を押しつけていいのかということが挙げられる。

このように見てくると、日本においては、社会にホームレスの人々が包摂されるためには「就労による自立」「脱路上」が必要とされていることがわかる。そして、そのルール

に乗ることのできない場合は「自立していない」とみなされ、その包摂策、ひいては日本社会に「包み込まれない」ことになる。

「ビッグイシュー」においても、当初は「自立支援法」同様、雑誌販売の仕事を足がかりに「就労自立」「脱路上」が目指されたが、16年余の活動の中でその包摂策が変容を遂げている。次章以降ではなぜそれが可能だったのかを確認する。

4 「ビッグイシュー」における包摂策の変遷

4-1 「ビッグイシュー」とは？

『ビッグイシュー日本版』は、前述したようにホームレス状態の人々に雑誌販売の仕事を提供するメディアのことで、このような「ストリート・マガジン」は現在約35カ国に100紙・誌程度存在する。1989年ニューヨークで、初のストリート・マガジン『ストリート・ニュース』が誕生し、1991年にロンドンで『ビッグイシュー』が創刊されると、1990年代を通して欧米で「ストリート・マガジン」がムーブメントとして席卷した。東アジアでは、2003年に『ビッグイシュー日本版』、2010年に『ビッグイシュー韓国版』『ビッグイシュー台湾版』が相次いで創刊されている。

仕組みとしては、『ビッグイシュー日本版』を例にとると、販売希望のホームレス状態の人がビッグイシュー事務所を訪れると、まず10冊を無料で提供する。完売した3,500円を元手に、以降は1冊170円で仕入れ、350円で販売することで、1冊180円の利益を得る。1日平均20～30冊販売することで、3,600円～5,400円の利益となる。住所・経験・履歴書なしで、ホームレス状態であれば原則的に誰でも始めることができる。

大阪の路上にて産声を上げた『ビッグイシュー日本版』は、2018年9月に15周年を迎えた。同社ウェブサイト（有限会社ビッグイシュー日本2019）によると、この15年間で811万冊の雑誌を販売、12億1,915万円の収入を販売者に提供し、延べ1,837人が登録、200人が新たな職に就くなどして“卒業”している。また、2018年8月末の時点で、114人が全国12都道府県で販売している。

現在は1冊350円、32ページのオールカラー版で、月2回3万部程度発行されている。読者層は、2017年7月の読者アンケート（回答数624／有限会社ビッグイシュー日本2017）によると、63.5%が女性。40代～60代を中心に幅広い年代層に読まれているという。職業は会社社員・団体職員が25%、自営業・専業主婦・パート・アルバイトが各12%などとなっており、購入頻度は「毎月購入する」が63%。購読開始時期は「4年以上前から」が65%、購入理由は「販売者とビッグイシュー両方の応援」が47%、「販売者の応援のため」

が33%、「内容にひかれて」が18%となっている。

前述したように「ビッグイシュー」のスローガンは、「ホームレスの人の仕事をつくり、自立を応援する」である。雑誌の販売者は、当初は「就労自立」「脱路上」という「自立への道」に乗ることが要請されたわけだが、この「自立」の意味が創刊以来変遷を遂げている。

本章では、「ビッグイシュー」における包摂策の変容を捉えるために、まず「ビッグイシュー」における「自立」の意味の変遷をたどる。そのためにまず、ホームレス状態である販売者のライフストーリーが語られる『ビッグイシュー日本版』における「今月の人」の誌面分析を行う。そして、「今月の人」において、いかに「自立」が語られてきたかを確認する。次に、「ビッグイシュー」という組織のあり方がどのように変わってきたのか、同社資料などから明らかにする。

4-2 『ビッグイシュー日本版』「今月の人」誌面分析

2003年～2019年において、『ビッグイシュー日本版』内では、どのようにホームレス状態の人々の「自立」は語られたのであろうか。この節では、販売者のライフストーリーのコーナーである「今月の人」における表象を取り上げる。

「今月の人」は2号（2003年11月6日）から『ビッグイシュー日本版』内で開始され、毎号1人の販売者が1ページにわたって「なぜホームレス状態に陥ったのか」「現状」「お客さんとのやり取り」「将来の展望」などを語る。2019年9月1日発売の366号までで、300人超の国内外の「ストリート・マガジン」の販売者が実名で近影とともに登場した。なお誌面では販売者は実名で登場しているが、本稿ではプライバシーを考慮して仮名とする。

『ビッグイシュー日本版』が創刊された2003年～2006年までは、「今月の人」に登場する販売者はほぼ50～60代の日雇いや野宿を経験した中高年男性である⁽¹⁾。だが、2007年に入ると、20～40代の若手販売者も登場し始める。彼らはいくつ最近まで派遣労働に従事していたり、現在もネットカフェで寝泊まりしたりしている人たちである。

創刊間もない頃に、中高年販売者が語る「自立」の道のりは明確だ。例えば、4号（2004年1月8日）に登場するAさんは、「わけあって、過去を置いて」故郷を離れ、さまざまな仕事をしながら大阪の西成へやってきた。一昨年病気で入院するまでの間は、15年以上

⁽¹⁾ 初期の「今月の人」においては販売者の年齢は明記されていない号も存在するが、近影や記事内の経歴などにより、インタビュー当時、ほぼ全員が50～60代であったことが推測できる。

日雇い労働で生活をしてきた。自身の「自立」観について「自立いうんは『自分が働いた金で食べて、布団の上で寝る』ということやと思うんです」と語る。

また、沖縄から上京し、とび職に就くも会社の倒産で失職したという106号（2008年11月1日）のBさんも「仕事があれば、人は人として認めてくれる」と言う。

110号（2009年1月1日）に登場するCさん（64歳）は、北海道生まれの東北育ち。中学卒業後は就職のため上京し、しばらく工場で働いていた30代前半の頃に大阪へ。「ビッグイシュー」の前は、アルミ缶を集めて生計を立てていた。Cさんも、「目標はお金貯めてアパート借りて、自分の城をもつこと。職種は問わないから、仕事についてしっかり働くこと」と語っている。

これらの語りには「就労による自立」「脱路上」＝「自立」という思考が透けて見え、「自立支援法」や、「ホームレスの人の仕事をつくり、自立を応援する」という「ビッグイシュー」のスローガンとも共鳴する。

だが、2008年7月から2010年7月にかけて、「ビッグイシュー」では、販売者（東京）の平均年齢が56歳から45歳へと下がる（ビッグイシュー基金2010）。2007年頃から「今月の人」に登場し始める若手販売者においては明確な「自立への道」は語られない。代わりに語られるのが、劣悪な労働環境に直面し、転職の困難さを突きつけられるうちに、「就労自立」への意欲が削がれている様である。確かにこの時期、20～40代男性の非正規雇用者数が激増している。独立行政法人労働政策研究・研修機構（2019）によると⁽²⁾、25～34歳男性の非正規職員・従業員は2003年に79万人（役員をのぞく、全雇用者数に占めるパーセンテージ＝11%）だったのが、2008年には101万人（同17%）となっている。同様に、35～44歳男性の非正規職員・従業員は2003年に37万人（同6%）だったのが、2008年には61万人（同9%）となっており、「今月の人」若手販売者の語りからも激変する雇用状況が如実に伝わってくる。

105号（2008年10月15日）のDさん（36歳）は石巻出身。父親が営んでいた青果業がうまくいかず、大量の借金を抱え込んでしまい、一家は離散する。27歳の時、派遣請負会社に登録。その後3年間に、仙台で車部品の成形、一関でアイスクリーム工場のライン、山形で半導体の検品、埼玉でブラウン管チェック、群馬でカーエアコンの検品……と計7つの職場を転々とするようになる。

職を探そうと職安に行ったこともあったけど、派遣請負は何のスキルにも何のキャ

⁽²⁾元データは、総務省統計局「労働力調査」（詳細集計）より。

リアにもならない。正社員になるのが、こんなに厳しいとはねえ。

というDさんの語りからは、「就労」と言っても、これまでのような断片化したキャリアしか積めない派遣請負ではなく、着実にキャリアを詰める正社員としての雇用を求めていることがわかる。だが、困難に直面し、立ち往生している姿が浮かび上がってくる。

77号(2007年8月15日)のEさん(37歳)も、大学中退後、派遣社員として働いてきた自らの就労体験を語っている。

いわゆる今問題になっているワーキングプアとかそういうことですよね。僕がずっとやっていた派遣社員や請負って、最初はよくてもどんどん状態が悪くなっていく。

職場環境の悪化に精神的に参ってしまい、派遣会社を飛び出した。それは、寮を出て、住む場所も失うことを意味した。こんな状況で実家に帰るわけにもいかず、「ひとりぼっちで、誰ともしゃべらない」日々が続き、いよいよ精神的にも金銭的にも「ヤバいな」という時期にビッグイシューと出会ったという。今後の就労への意欲に関しても

今はそんなところまではっきりと頭がまわらない。まずは金を貯めて住む所を見つけないと、と思っています。

と話す。

このような「就労自立」の難しさとともに、「脱路上」の難しさも誌面で語られる。例えば160号(2011年2月1日)の「今月の人」は特別編成となっており、なぜ冬の厳寒期に野宿する販売者が畳の上へ上がれない、もしくは上がらないのか、販売者たち自身によって語られている。

誌面によると、2010年末の時点で大阪の販売者44人の寝場所はアパート16人(うち生活保護9人)、簡易宿泊所14人、ネットカフェ他4人、不明3人、野宿者7人。その野宿者7人に対してアンケートを行っている。

興味深いのは、今の平均的な売り上げに見合い、かつ家賃額が手元にある時、すぐ入居したいかという問いには、「はい」「いいえ」がともに3人ずつだったという(1人不明)。理由としては、「不安がある(売上が安定するかどうか)」「病気になった時」「目標をたがずに入居すると家賃支払い自体が目標になる」「気持ちの整理がついていない」とあり、これだけ見ても、「脱路上」をしない／できない理由が一枚岩でないことがわかる。また、

仮に「脱路上」しても、その後家賃を払い続ける日々が待っており、不安定な収入によりそこから脱落する人も出てくるはずで、「脱路上」もある一点を指すべきものではなく、長い過程を含むべきものだということがわかる。

さらに号が進んでいくと、そのような「自立」を考える以前に、職と家を同時に失って路上に放り出され、ただただ呆然とする若者の姿が描かれるようになる。

168号（2011年6月1日）のFさん（38歳）は、兵庫県出身。父・母・祖母・姉のどこにでもある「普通の」家族だったという。中学卒業後、地元の会社に就職するも、30代で相次いで両親を病気で亡くす。会社の間人関係もうまくいかず職を辞してから、さまざま職を経験するが、最後の職はわずか1年足らずでリストラされてしまう。夜行バスで上京するも、次第に所持金が底をつき始める。

残金ゼロになってからは本当にどうしていいかわからなくなって、東京駅や新橋あたりをぶらついて何も食べずに水だけで過ごすという日が1週間近く続いたと思います。

さすがにこのままでは死んでしまうと、Fさんは交番に助けを求めたという。

187号（2012年3月15日）のGさん（44歳）の場合は、高校卒業後に地元の印刷会社に就職。だが、ある病気で3ヵ月ほど入院したころから暮らしが揺らぎ始めた。入院中に当時借りていたアパートの家賃を払えなくなり、解約。退院した瞬間にホームレス状態になっていた。

退院後は車で寝泊まりする日々。最初のころは「今だけ、なんとかなる」と思っていたというが、車検が切れて車が動かなくなり、プリペイド携帯料金を払えなくなった時点で、社会とのつながりがぶつりと途絶えた。

道端に落ちている唐揚げをカラスと奪い合うこともありました。08年から09年あたりは、いつあの世に行ってもおかしくない状態で、完璧にあきらめていましたね。

Gさんも警察から職務質問を受けた際、窮状を訴えたことがきっかけとなり、「ビッグイシュー」と出会う。

一方、192号（2012年6月1日）のHさん（48歳）は長らくパン工場に勤めていたものの、母の介護のため退職。半年間の介護生活の後、母を見送り、しばらくは何もやる気がせず、ぼんやりとしていたという。その後一度は転職を果たしたHさんだったが……

その会社が不景気でつぶれて、それからですね。毎日仕事探しても全然見つからなくて、最後落ちるのは早かったなあ。

「リストラ」「自らの病」「介護」という人生に突然降ってわいた不測の事態に、なすすべもなく茫然自失となったり、自暴自棄になったりして、路上へ出た人たち。創刊当時に語られていた「脱路上」「就労」に根差した「自立」の物語が、にわかに通じなくなったかのように感じさせる「今月の人」後期である。その背景には、未曾有の経済危機と呼ばれたリーマンショックや非正規雇用の増大といった労働環境の激変が影を落としている。

こうして見てくると、ホームレスの自立支援といっても、当事者の年齢やホームレス状態に陥った過程、またその時の社会の状況に応じて、内容が変わってくるのが自然とも言える。

4-3 「ビッグイシュー」、組織のあり方の変遷

『ビッグイシュー日本版』創刊以来、複雑さを増していった「ホームレス問題」。「ビッグイシュー」という組織のあり方は、2003年～2019年の16年の間にどのような変遷を遂げたのか。本節では、同社資料などを元にこの点について見ていきたい。

「ビッグイシュー」創設当初に配布されたパンフレットには、自立へのステップが次のようにまとめられている。

自立は人それぞれ、人の数だけかたちがあります。私たちは、自立とは自らの力で生活を立てているという“誇り”ではないかと考えています。自立へ、私たちは次の三つのステップを考えています。

- ①簡易宿泊所（1泊1,000円前後）などに泊まり路上生活から脱出（1日25～30冊売れば可能に⁽³⁾）
- ②自力でアパートを借り、住所を持つ（月2回刊により、1日35～40冊売り、毎日1,000円程度を貯金、7～8ヵ月で敷金をつくる）
- ③住所をベースに新たな就職活動をする
（有限会社ビッグイシュー日本パンフレット2003）

⁽³⁾『ビッグイシュー日本版』は、創刊当初は1冊200円で販売されていた。

雑誌の販売目標数まで織り込み、具体的なステップを提示する一方で、当初から「自立は人の数だけかたちがある」と柔軟な姿勢を示している。一方下記のように、2012年の改訂版では具体的な数値目標が姿を消し、3ステップのみが示されている。

ビッグイシューでは、雑誌の販売を通して、第1に屋根のあるところに移り、第2に貯金してアパートを借り「住所」を持ち、第3に新たな「自立の道を探す」という3つのステップを応援することなど、自立への道を歩めるようサポートします。

(有限会社ビッグイシュー日本パンフレット2012)

上記2例における「自立」は「就労自立」を指すと思われ、この段階での「ビッグイシュー」の「自立」は「脱路上」と「就労自立」を、段階を追って目指していくというシンプルなものだった。

だが、「就労自立」「脱路上」の難しさ、ひいては「自立」の難しさに徐々に直面していった「ビッグイシュー」は、2007年9月、ある決断をする。それが、NPOビッグイシュー基金の立ち上げである。その理由を佐野章二代表が、以下のように語っている。

これまでのビッグイシューの経験によって、ホームレスの人が新しい仕事を見つけて自立していくには生活面のサポートや就業支援、とくにメンタル面での支援が重要だとわかってきたんです。せっかく頑張って働いても、販売員によっては翌日は働かない人がいたり、病気になったりすることも多いので、常に生活上の問題とも付き合っていく必要があるんです。

しかし、ビッグイシュー日本としては、雑誌を販売するためのサポートに集中しているので、どうしても彼らの生活支援までは手が回らなかったんです。イギリスのビッグイシューでも、そうした販売員の生活支援や就業支援をファウンデーション（財団）が担っていて、雑誌販売をサポートするビッグイシュー日本と、生活支援をするビッグイシュー基金の両輪があれば、ホームレスの人たちの自立も、もっとスムーズに行く。その両輪があって初めて、ホームレスの社会復帰を語るができると思っています（稗田2007:225）。

ビジネスの手法で「ホームレス問題」という社会問題に対峙することを謳った「ビッグイシュー」だったが、その「自立」の道に乗ることが難しい人々が現れた時、彼らを「自立の意思がない」と断罪するのではなく、彼らの生に沿ったより細やかな仕組みづくりの

ためにNPOを立ち上げるという選択を行なった。

つまりこれまで続けてきた「就労自立」「脱路上」という包摂策がうまく機能しないという事態に際し、その責任を対象に帰するのではなく、包摂策の方を変容させることで対処したわけである。

ビッグイシュー基金のウェブサイトによると、現在の活動は「ホームレスの人たちを中心に困窮者の生活自立応援」「ホームレス問題解決のネットワークづくりと政策提案」「ボランティア活動と市民参加」という3本柱によってなされている（ビッグイシュー基金2019a）。第12期（2018年9月～2019年8月）の年次報告書によれば、「生活自立応援」は例えば、健康・福祉・法律相談や、低家賃で住居を提供する「ステップハウス」事業などである。「ネットワークづくりと政策提案」では、ホームレス状態に陥る主因の一つと言われるギャンブル依存症に関する研究チームを発足させ、2つのレポート『疑似カジノ化している日本——ギャンブル依存症はどういうかたちの社会問題か?』（2015年10月15日発行）『ギャンブル依存症からの生還——回復者12人の記録』（2016年8月15日発行）が国会で審議資料となったりしている。「ボランティア活動と市民参加」においては、1,198人の登録ボランティア、延べ2,969人の市民応援会員らを巻き込んで、活動の裾野を広げている。

現在『ビッグイシュー日本版』の制作・販売を担う有限会社ビッグイシューのウェブサイトには、当初のような3段階のシンプルな「自立」の道のりは指し示されていない。一方、ビッグイシュー基金のウェブサイトにおいて、「自立」の道のりの多様性が示唆されている。

一度ホームレス状態に陥ってしまうと、生活再建のハードルは段違いに上がります。一つは、食べるための収入を得る「仕事」の確保の問題。履歴書、身分証、連絡先、住所がなく、その日にお金を受け取れる仕事の選択肢は、多くありません。

もう一つは生活の基盤となる「住まい」の確保の問題。たとえ収入があっても、まとまった初期費用の用意や保証人の確保が難しいこと、携帯電話や身分証がないことから、市場賃貸物件へのアクセスは非常に困難になります。

生活再建の道筋はその人の状況や課題に応じて違いますが、解決に踏み出すどんな一歩も、チャレンジであることに変わりはありません。（ビッグイシュー基金2019b）

2003年9月の創刊以降複雑さを増す一方の「ホームレス問題」と対峙するのに際し、「ビッグイシュー」では包摂策を柔軟に変化させてきたことがわかる。つまり、シンプルな3ステップの包摂策を皆に当てはめることをやめ、「生活再建の道筋はその人の状況や課題に応じ

て違う」ことを認めて、基金を立ち上げてそのサポートに回ったのである。

だが、その包摂策の変容は、ただ社会動向からもたらされただけではない。包摂策の対象であるはずの「ビッグイシュー」販売者も、自分なりの日常実践を通じて、包摂策に変容をもたらした。そして結果的に「ビッグイシュー」という場の可能性を広げていた。

次章では、包摂策に「適応」できない場合でも「逃亡」するのではなく、その場に留まり続け、自分なりの日常実践を通じて、結果的に「ビッグイシュー」という場の可能性を広げた販売者3人の日常実践に焦点を当てる。

5 「ビッグイシュー」販売者3人への聞き取りから

この章においては、「新たな就労」「脱路上」という当初の「自立の道」からは「逸脱」しながらも、「ビッグイシュー」に留まり続けた3人の販売者への聞き取り内容をまとめる。

まず、「ビッグイシュー」に出会う前まで、彼らがどのような人生を歩んできたのか、ライフストーリーを記す。その後、包摂策に合わずとも、「適応」も「逃亡」もせずに留まり続けることで、結果的に「ビッグイシュー」という場の可能性を広げた彼らの日常実践を描く。

分析には、学术界・政界・NPOといったアソシエーションなど、様々なフィールドで「社会的排除／包摂」に思考を巡らせている阿部彩の論を補助線としたい。阿部によると、人が包摂される単位は、国家のみでなく、会社、労働組合、地域、町内会、家族、そして、様々な私的なグループやクラブなどがあり、この幾重もの「小さな社会」は、ただ単に生活を保障したり、いざというときのセーフティネットの機能を持っていたりするだけではないという。これらの「小さな社会」は、人が他者とつながり、お互いの存在価値を認め、そこに居るのが当然であると認められた場所であり、これが「包摂されること」なのである（阿部 2011）。

本章では、阿部の言う、関係からの排除で失った「つながり」、仕事からの排除で失った「役割」、居るのが当然であると認められた場所からの排除で失った「居場所」の取り戻しに注目して分析を行う。すなわち、3人の販売者は、その日常実践により「つながり」「役割」「居場所」をどのように「ビッグイシュー」で取り戻したのかを確認する。なお、分析枠組みに用いた「つながり」「役割」「居場所」は、そこに焦点を当てるという意味で、各人の日常実践が複数の領域にまたがっていることもある。また、同様の日常実践を行なっている他の販売者のエピソードが登場することもあることを明記しておく。

聞き取りは、2017年～2019年にかけて行われた。Xさんに関しては2019年4月24日

と5月23日の2回、各1時間程度話を聞いた。Yさんに関しては、2017年8月11日に1時間程度話を聞いた。Zさんに関しては2018年1月24日に1時間程度話を聞き、2018年5月27日に行われた街歩きイベント、2019年8月19日にQ大学で行われた「出張授業」にも参加した。インタビューの場所はそれぞれの販売場所近くの喫茶店で、形式は非構造化インタビューである。また筆者は2004年7月～2015年6月までの11年間「ビッグイシュー」にて編集スタッフとして勤めており、その間日常的に3人とも接していた。

5-1 居場所——Xさん（49歳）

Xさんは、九州の離島出身。高校を卒業した後、陸上自衛隊に4年間在籍し、22歳の時に上京した。だが、ストレスがかかるとチックを発症するため、なかなか仕事が長続きしなかった。また実家の家業を継ごうとした時期もあったが、うまくいかず挫折した。

そんなある日、チック症が原因で関東圏のある現場から追い出されてしまい、そのまま逃げるように着の身着のまま新宿に流れ着く。

新宿に着いたんやけど、ホームレスのおっちゃんから、「本物のホームレスの格好してどうしたん？」って言われて、はじめて（自分がホームレス状態に陥っていることに）気づいた。「区役所で乾パン売ってるから」って（言われて）。その時お腹が鳴って。（2019年4月24日聞き取り）

2008年にビッグイシュー販売者として登録。東京で販売をスタートしたものの、Xさんは、以降9年の間で3度「ビッグイシュー」のもとを去った。

やめたのは嫌になったんやね。いつも、おやじ・おふくろ・社会から逃げてる。田舎が重荷になってる。なんとなく田舎の人に似てる人が売り場に現れると、逃げたくなる。（2019年4月24日聞き取り）

だが出戻るたびに、スタッフや販売者仲間はさして問い詰めるでもなく歓迎してくれたという。4度目に出戻ってきた時の気持ちを、Xさんは自身が登場した「今月の人」（2017年9月1日）にてこう語っている。

リヤカー引きで足を痛めてどこにも行くところがなかったこともあるけど、販売者仲間に戻ってきてほしいと言われたのが大きかった。本来、ビッグイシューは卒業し

て社会復帰していくのが筋だけど、自分も含め販売者の中には高齢であったり、障害を持っていたりして、どうしてもここに留まらざるを得ない人もいる。そういう人たちがこの仕事に幻滅することなく、希望を持って雑誌を売って、販売者として社会に存在していけるような雰囲気づくりに自分も貢献できれば。

Xさんのように「ビッグイシュー」に出戻ってくる販売者は、最近「今月の人」に多く登場するようになった。例えば、326号（2018年1月1日）のIさん（57歳）は、引越越し屋で20年働くも、ギャンブルの借金で路上へ。『ビッグイシュー日本版』の販売を経て一度は再就職したが、再び販売者となったのは6年前。内心はドキドキだったという。

周囲の期待を裏切って自立に失敗したわけだから、怒られるのは覚悟していたけど、……「またがんばればいい」と言われた時はホッとしたよ。

また、329号（2018年2月15日）のJさん（36歳）は、水頭症の後遺症から左足が少し不自由で、今も歩くと左足が遅れてついてくる。生活保護の家庭に育ち、養護学校を経て、地元のスーパーに就職したまでは良かったが、その後は職を転々として20代前半でホームレスを経験。26歳の時に販売者となってからは、東京と大阪を行き来しながら、職を求めてビッグイシューを離れてはまた舞い戻るといふ生活を続けて来た。

一昨年からビッグイシューに復帰して、もう何度目かの復帰かわからないぐらいで、スタッフには「またか」って思われているかもしれないけど、何があっても最後はビッグイシューの仕事があると思える安心感は大きかった。

と語る。

実はXさんたちの前には葛藤を抱えた先輩販売者、Kさんがいた。『ビッグイシュー日本版』販売者時代は、大阪のビジネス街で月間1,500冊を売り上げるカリスマ販売者。お客さんと積極的に交流を図り、独自のコミュニティを形成していた。ある日、常連客からビルのテナントを一軒一軒まわって清掃する仕事を紹介され、「ビッグイシュー」を“卒業”し、就職を果たす。だが、いざ働き始めると、「ビッグイシュー」時代とはまるで異なる仕事内容に戸惑いを覚えた。トータル13時間ほどを職場で過ごすも、休憩時間にはシルバー世代の同僚の話についていけない。

「最初の半年は、とにかく家を出るのがつらかった」（稗田2007）と、Kさんは素直に打

ち明けている。

戻って、またみんなの顔を見ながら楽しくビッグイシューを売りたいなーって何度も思ったよな。やっぱりな、長い間、社会から離れて暮らしたやんか。だから、それが自分の甘いところなんやと思うんや。正直言って、こんなに社会生活が辛いとは思ってなかったな。ほんと、自立、自立って言葉では言うけど、そんな甘いもとは違ったよ。(稗田 2007: 137)

Kさんが66歳で得た「自立」の道には、1日10時間以上の勤務で天引き後15万円の月給と、3ヵ月ごとの契約更新が待っていた。

最近、同僚が次々に契約解除になってるから不安はあるけどな、ちょうど昨日、次の契約のOKをもらったんや。3ヵ月だけ命が延びたね。(稗田 2007: 140)

「出戻る」という包摂策からの「逸脱」行為や、就職した元販売者の葛藤が私たちに訴えかけてくるのは、使い捨ての労働力としてでも「社会に包摂されたいですか」という素朴な問いだ。

阿部(2011)も、包摂する側の社会が提供する「役割」の劣化を指摘する。

職場で「アルバイトさん」などと名前さえも呼ばれず、人間関係も育まれず、不景気になればモノのように切り捨てられる。次の職に就いたときに評価されるような経験を得ることはない。このような職では、社会から「承認」を得たと感じることは、極めて難しいのではないだろうか。

就労支援の先に、このような就労しかないのであれば、それは社会的包摂政策とは言えない。(阿部 2011: 113)

この阿部の指摘は、2章におけるジャック・ヤングの「排除型社会」論とも共鳴する。

Xさんは今、これまでの就労で得たのとはまったく違う形で「ビッグイシュー」で「役割」を得ている。それは、自身のホームレス体験で得た知恵を、出張授業で話すことである。これまで小学校から大学まで、様々な場で自分がホームレス状態に陥った過程や、現状を語り、若い世代へメッセージを送り続けてきた。Xさんにとって、このような出張授業を

受ける目的は、「自分が生きている証拠、存在証明」⁽⁴⁾なのだという。

現在は、NPO 法人ビッグイシュー基金を通じて、「ステップハウス」⁽⁵⁾に入居している X さんにとって「ビッグイシューとはどんな場所ですか？」と聞いてみると、「必要不可欠な場所やね。生活の基盤かな」(2019年4月24日聞き取り)との返答を得た。

設立当初「ビッグイシュー」が目指していた「脱路上」「新たな就労」という既定路線からは外れた「出戻る」という「逸脱」行動。「出戻り販売者」の存在は、「ビッグイシュー」という組織のアイデンティティも変容させた。つまり、「脱路上」「就労自立」第一主義ではなく、“卒業”したい人はして、留まりたい人は留まり、戻ってきたい人はいつでも戻ってくるのできる「居場所」の提供である。

出戻ってきた販売者たちの「逸脱」行動によって、結果的に「ビッグイシュー」における「自立」の意味は変容を遂げ、「居場所」の可能性は増した。

5-2 つながり——Y さん (77 歳)

Y さんは関東生まれだが、戦争中は疎開していた。

肺結核なんかずっと病気になっていたのが小学校3～4年くらいまで。でもその頃は悲惨な記憶何もないの。何やっても楽しかった！ 学校も成績優秀だしさ(笑)。遊びほうけてた。(2017年8月11日聞き取り)

その頃は戦争孤児を預かる施設に入り浸っていた。1つ違いの弟は、入院中の母親にべったりしていたという。その後、県立高校から1960年に国立大学に入学した。28歳の時に結婚をして、子どもも生まれた。当時、中国の古銭の売買を商売にしていたが、ある時期、半値に値崩れしてしまう。

何とかかなと思ったんだけど、何にもならなかったわけ。それで旅に出たわけ。逃げちゃったわけ。人生から逃げ切ろうと思ったわけ。

借金取りに電話をして。日延べを頼んで「払えませんが、後でちゃんと払いますから」って。受話器置いたら、ぶつんと切れちゃってね。(電話を)「すみません、すみません」って切っちゃったわけよ。そんなことの繰り返しで(今も)電話ノイローゼ!

⁽⁴⁾2019年8月19日のQ大学出張授業にて

⁽⁵⁾連携団体や、一般の家主の方から提供される空き物件を、『ビッグイシュー日本版』販売者やその他のホームレス状態の人々に、低廉な月額利用料(15,000円～)で提供する事業のこと。

一種の強迫観念。(2017年8月11日聞き取り)

その後関西に流れ着き、橋の上で「露天商」をやっていたという。家はなかったから車中泊。20年間くらい一度も布団で寝たことがないという。だが、「ビッグイシュー」に漂着した時には、もうすでに身体がボロボロで即病院にて診察を受けることとなった。

43歳で人生を捨てたわけ。捨ててからは、社会から疎外されたとか、そういうこと一切ない。一切捨てちゃったんだから。何の苦労もないわけ。でも43歳までは、子どもや家族の悩みからいろいろあった。でも一回捨てた後は、悔しくて泣いたこともなければ、嬉しくて狂喜乱舞したこともないの。だからまともじゃないって自分でも思うの。

でも「ビッグイシュー」来たら、いろんな悩みが出て来た。そこから新しい悩みが始まったわけよ。そりゃいろいろ悩みはあるけど。悩みがあるのも、まともな状態なんだよ。この30年間、悩みなんて一切なかったんだから。過去も全部捨てたし。(2017年8月11日聞き取り)

43歳で人生から「逃げ」、過去も全部「捨てた」というYさん。以降、喜怒哀楽や悩みもなくなったと語る。だが、「ビッグイシュー」と出会って、「悩み」を取り戻したという。

そんなYさんは現在、『ビッグイシュー日本版』の人気コーナー「ホームレス人生相談」の名物回答者の一人である。「人生相談」は、たとえばこんな具合に展開される。

209号(2013年2月15日)では、「生きる価値が見いだせない」と題して、4年制大学卒業後、職を転々とした未婚の37歳の女性のお悩みが語られる。「自分の人生、生きる価値があるのかと思う」という女性に、Yさんは「僕は、学校も仕事も家庭も中途半端で、社会から逸脱して長いけど、まだなんとか生きてる(笑)」と答える。

でも、自分を不幸だとは一度もおもったことないの。……自分のできることを精いっぱいやってきたからだと思う。それこそホームレスになって、粗大ごみを集めていた時期でも、誰よりも早く現場に行って一番いいものを見つけたかったし……

読者からの「人生相談」に乗っているようで、自らの半生を振り返っているYさん。「ホームレス人生相談」の場合は、自らの人生を省みる機会ともなっているようだ。

221号(2013年8月15日)では、「結婚10年目、夫婦仲がよくなる秘訣は？」という

45歳、男性会社員のお悩みに対して「僕は未熟なあまり、妻や子どもと別れることになってしまって、結局ホームレスにまでなっちゃった」と打ち明け、こう続ける。

路上で生きるって決めたときは、希望も夢も何もかもなくなって、ある意味捨てばちのお気楽人生だった。だけど、ビッグイシューを売り始めてから、何だか長生きしなくなったり煩惱が出てきて、苦しんでるの。人生って難しいね（笑）。

「人生って難しいね」という言葉で、家庭持ちの会社員と、独り身のホームレス状態を生きるYさんの間の関係に、普遍性によって架橋されうる余地が生まれる。こうしてYさんは、自らの思い通りには進まない人生を生きるという普遍性に着目することにより全く異質な世界に生きるはずの「会社員」と「ホームレス」の境界を越え、自らが体験した苦境から得た知恵や教訓によって、「人生相談」に回答するのだ。

「ホームレス人生相談」のコーナーは後に書籍化されたが、文庫版のあとがきにはこうある。

ある時、多くの販売者が、路上で若い読者の相談にのっていることがわかって始まった雑誌のコラムでした。苛酷な暮らしをしているホームレスの人が気楽に読者と話してつながる、そんな場が、路上から誌上へと展開し、可視化されていきました。それは相談者以上に、相談相手になった販売者にとって自己確認と肯定のチャンスになったと思われる。（ビッグイシュー販売者 2011: 224）

通常なら隠しておきたいであろう、ホームレス状態になった道りを惜しげもなく披露する回答者。それは、もちろん相談者の悩みに答えるためなのだが、そうやって自らの「失敗」とも言える体験をあえてカミング・アウトし、その経験を踏まえてアドバイスをすることで、自らホームレス体験を振り返り、吟味し、次に向かう原動力の芽のようなものを得る作業だったともいえる。

一方、相談者にとっては、自分の悩みを吐露し、耳を傾けてもらえる機会を得て、1人で悩みを抱え込まずにすむ。そしてまた、次の一步を踏み出す力を得る。

社会学者の矢崎千華は、「紙上『身の上相談』を分析する社会学的視点：社会的構築主義からの批判的検討」において、「何か困ったとき、他人に相談するということ、それ自体は生きてゆくうえに非常に大事なコミュニケーション形式であり、複数の人間の協力による思考、問題解決は、新しい社会をつくる原動力になる」と加藤秀俊（1953）の「身上相

談の内容分析」を引き、「人びとはさまざまな困難に直面し、対応しながら生活している。そのような格闘の蓄積が、人びとの生きるための叡智であり、新しい社会を構築していく一部となっている。そのような人びとの経験を共有化する機能を持つのが『身の上相談』である」と述べる（矢崎 2013: 32）。

一般的な「人生相談」は、相談者が直面した困難を語り、それを回答者が受け止める。だが、『ビッグイシュー日本版』誌上での、相談者とホームレス状態にある回答者とのやりとりは、仕事、家族関係、人生の不条理といった相談者の苦闘に、回答者の苦闘が共鳴する。アーサー・クライマンは、「コミュニティはサファリングを生み出しもするが、サファリングからの回復への手がかりを与えてくれる力の源泉ともなる」（Das and Kleinman 2001）と指摘しているが、「ホームレス人生相談」は従来の一方向なものではなく、まさに互いの格闘を共有することで、ともに生き延びる力を得るような場になっているようだ。

通常、「中堅会社員」と「年配のホームレス」が関係性を築くのは難しい。だが、Yさんは、「ホームレス人生相談」において、相談者の人生の苦闘に自らの人生の苦闘を共鳴させて、その隔絶に架橋した。一度は人生から「逃亡」したYさんが、「ビッグイシュー」と出会い、再び「悩み」を取り戻した。その「悩み」を通じて、社会とのつながりを取り戻したとも言える。そして、「ビッグイシュー」という場にも、新たな「つながり」の可能性をもたらしたのである。

5-3 役割——Zさん（68歳）

創刊号からビッグイシューの販売を続けているZさんは、大学卒業後信用金庫に就職したものの、図書館で働きたいという夢を捨てきれず嘱託スタッフとして転職。以降14～15年働いた。

だが、その職も辞してアルバイトに転じ、実家を出たことがきっかけで、路上生活へ陥った。

炊き出しに並ぶと3食はあるけれど、まだ50代やし、何とか職はないかなと（探していた時期に）、ラジオで「元手もいらんし」ということで（「ビッグイシュー」が紹介されていて）興味があって。

仕事がしたくて。元手もいらんしということで、これにのろうかなと。（2018年1月24日聞き取り）

30代、40代の頃は、図書館で働きながら全国のウォーキング・イベントに参加していたというZさんは、大の街歩き好き。好きが高じて、2007年1月には「ビッグイシュー」において自ら街歩きクラブを主宰してしまった。

現在、大阪市内を中心に年9回のペース（7・8・12月をのぞく）で街歩きを開催しており、歩くコースも街歩きの歴史出版物などを参考にしながら自ら企画している。

2018年5月にはついに100回を数え、記念ウォークを開催。『ビッグイシュー日本版』の誌面でも取り上げられた。

当該誌面である338号（2018年7月1日）にて、Zさんはこう語っている。

僕は普段から街の片隅にある自分しか知らない発見をするのが楽しみで歩いていますが、歩こう会を11年も続けてこられたのは喜んでくださる参加者がいてくれたからこそで、僕一人では到底できなかったこと。

「喜んでくださる参加者」によって、街歩きクラブ主宰者という「役割」が定着していったことがわかる。

2009年から会に参加する常連メンバーのPさんは、また同記事にて、

Zさんの鋭い方向感覚や距離感覚は超能力のようで、喜連瓜破のかつての環濠集落の面影を残す迷路のような道でもスッと迷わずに出てこられたのが特に印象的だった。コース選びも含めてZさんについて行けば安心して楽しめる。感謝の一言に尽きます。

と語り、Zさんの役割を「承認」している。

記念ウォーク後の茶話会には、有限会社ビッグイシュー日本の佐野章二代表も出席し、こう挨拶した。

仕事を作るだけでなく、クラブ活動を通してみんなで楽しみを共有し、会と時間をかさねることで、ひとつの独自の世界、“ホーム”をつくった。100回を重ね作った空間、その先をも味わえる幸せを共につくり続けたい。

創刊号から『ビッグイシュー日本版』販売を続けているZさんは、「新たな就労」という当初のビッグイシューの包摂策からは「逸脱」しているとも言える。だが、自ら会を主

宰し、常連さんから「Zさんについて行けば安心して楽しめる」という感想を引き出していることを考えれば、自ら「ビッグイシュー」という場で「役割」を生み出していると言える。

2019年8月19日にQ大学で行われた「出張授業」にて自らのホームレス体験を語った際、会場からは「雑誌販売の仕事は、次の就職への踏み台となるべきものとも思えたのですが、15年以上もビッグイシューの販売を続けているのはなぜですか」と聞かれたZさんは、以下のように答えている。

僕自身は本が好きで、雑誌販売の仕事も向いていると思っています。年齢も68歳で、これから新たな仕事を探するのは難しいと考えています。ですから、これからも自分のペースでビッグイシューの仕事を続けていければと考えています。(2019年8月19日、Q大学で行われた「出張授業」にて)

創刊号から15年以上雑誌販売の仕事が続けたZさん。「新たな就労」の代わりに、「ビッグイシュー」という場で長い時間をかけてお客さんやスタッフとの間に信頼関係を築き上げ、自ら会を主宰し「役割」を得るまでになった。

6 結論

本稿の目的は、なぜ「ビッグイシュー」においては「包摂策の変容」という第3の道が開かれたのかを解明することであった。それにはこれまで見てきたところ「ビッグイシューという組織のあり方」「販売者の長期にわたる日常的実践」「社会構造の変化」の3つの要素が絡み合っている。

1つ目の「ビッグイシューという組織のあり方」に関して言えば、当初は「自立支援法」同様「就労自立」「脱路上」が目指されてきた。だが「就労自立」の方は、「出戻り」の販売者が始めたこともあって、その限界が可視化された。3章の堤（2010）や山田（2003）の指摘のように、「就労による自立」一辺倒の限界が見えたのである。また「脱路上」においても、野宿状態に留まろうとする販売者に聞き取りをし、3章で阿部（2009）や鈴木（2008）が指摘したような「彼らなりの合理性」を見出そうとした。

そのことにより、イギリスの「ビッグイシュー」の先例に倣う形で、雑誌販売という「ビジネスの手法」だけでは包摂しきれない人々の生を基金によってサポートするという「有限会社」と「NPO」の両輪で活動を続ける道が開かれていった。

2つ目の「販売者の長期にわたる日常的実践」の方はどうであろうか。4-2の「今月の人」のライフストーリーにおいては何度も職を変え、そのたびに生きる場所を変えてきた人々の生が浮かび上がっている。対照的に、5章で取り上げた3人の販売者は長期的に「ビッグイシュー」という一つの場所にとどまることで、着実に社会関係資本を増やしていった。

そこでは、Zさんの街歩きクラブやYさんの「人生相談」のように、周囲の人たちと「楽しみ」や「苦境の共有」といったもので巧みにつながり、居場所を作り、役割を担うことで、「就労自立」「脱路上」という形ではなくても、自分の人生の舵を取っていくような「自立」の形が垣間見えた。またXさんたちのような「出戻り」という行動が「失敗しても戻ってくることができる、受け入れてもらえる」という安心感を「ビッグイシュー」という場にもたらした。彼らは「何度も出戻ってくる」「苦境を共有し、つながる」「楽しみ場を主宰する」という日常的実践により、結果的に場の可能性を広げていた。

「ビッグイシュー」の包摂策において、当初は「就労自立」「脱路上」が目指されており、その包摂策に乗らずに場に留まり続けた3者の行動は初めこそ「逸脱」行為とみなされていたかもしれないが、もはや、彼らのことを「逸脱者」というものはいないであろう。というのも、「逸脱とは、他の何にもまして、ある人間の行為に対する他者による反応の結果」(Becker 1963 = 1978)だからである。逆に、100回を越えて継続されたZさんの街歩きクラブや、371号(2019年11月15日)で332回を数える「ホームレス人生相談」などは、「楽しみ場を主宰する」「苦境を共有し、つながる」という新しい文化を「ビッグイシュー」に生み出したと言える。

3つ目の「社会構造」についてはどうであろうか。4-2において、「今月の人」に登場する販売者のプロフィールが、2006年～2007年を境に変化を遂げたことを見てきた。当初は50～60代の日雇いや野宿を経験した中高年男性が大半を占めたが、2007年に入ると、つい最近まで派遣労働に従事していたり、ネットカフェで寝泊まりしたりしている20～40代の若手販売者も登場し始めた。

セルジュ・ポーガムは貧困の基本形態を3つに分けて論じており、それは、大部分の人が貧困を経験する時代のスティグマ化の弱い「統合された貧困」、準完全雇用・失業率の低下した時代の周縁に置かれた人々のみが経験するため、スティグマ化が強い「マージナルな貧困」、そして失業が急増し排除リスクに対する集合的な不安が生まれる時代の「降格する貧困」だという(Paugam 2005=2016)。そして2016年に来日した際、日本の状況について「高度成長期はマージナルな貧困の時代、1990～2010年代は降格する貧困の時代とそれぞれ言うことができるのではないか」(Haffpost 2016)と語っている。

そのような社会構造の変容、人々の意識の変化を捉えるために、例えば高度成長期に

「ホームレス」の人々がどのように表象されていたかを確認したい。赤坂憲雄は、1982年の横浜浮浪者襲撃殺人事件に関して記した文章において、「市民社会の地平から転落すること、それは市民にとって限りもなく想像を越えたできごとである。境界を踏み越えてしまった浮浪者は、まさしく存在的に異質かつ奇異なもの＝異人にほかならない」（赤坂1991:89）と表現している。そして、「浮浪者がひとたび境界を侵し、内部をうかがうならば、かれらは即座に法と秩序という名の鎖で捕縛される」（赤坂1991:91）という。

そのような「マージナルな貧困」の時代においては、ホームレス状態を生きる人々とそうではない人々が集うことは「事件」であり、「苦境を共有し、つながる」「楽しみの場を主宰する」という日常実践の可能性は考えにくい。誰もが失業リスクへの不安を抱え生きる「降格する貧困」の時代への移行期だからこそ、3人の販売者の日常実践は可能であったとも言える。

「ビッグイシュー」に関しては、4-1で確認したように、これまでの延べ登録販売者数も1,822人と、総ホームレス人口比は決して高くはないし、定着率も1割程度と低い。「ビッグイシュー」を離れた販売者は、「なぜ・どのように離脱したのか」という問いも、また別の機会に検討されなければならないだろう。

それでも、「ビッグイシュー」にとどまった一人ひとりの販売者の日常実践に目を向けるとき、提示された「包摂策」に絡め取られることなく、自らの日常実践によって「包み方」までも提案するような双方向性を持つ「包摂策」が展開されていた。そして彼らの日常実践により、「ビッグイシュー」の包摂策は「有限会社」の雑誌販売事業という「経済的側面」一辺倒から「NPO」の立ち上げにより「社会的側面」「文化的側面」も加わり、より多面的なものへと変容していった。

失業を経験する人が増える「降格する貧困」の時代においては、包摂する側の社会に受け皿となる就職先がそもそも用意できず、「経済的側面」一辺倒の包摂策はますます立ち行かなくなることが予想される。宮本太郎（2013）は、リーマンショック以降、働き世代を含む「その他世帯」の生活保護受給者が急増しており、「生活保護を受給できた人々はごく一部であって、資産や所得が生活保護受給資格以下である人々は数の上で受給者を圧倒的に上回ると見られる」という。北川由紀彦（2010）はまた、生活保護は最低限の経済的基盤にはなっても、社会的孤立の解消までを保障するものではないと指摘している。

樋口（2004）は、「複層にわたる包摂のメカニズムを構築することによって初めて、現代社会に生きる人々の多元的なリスクに応じることができる」というが、「ビッグイシュー」という組織のあり方「販売者の長期にわたる日常実践」「社会構造の変化」という3点が重なり合い、2000年代の日本社会の片隅で行われていた新しい「社会的包摂」の形は、「降

格する貧困」の時代を生き抜く私たちにも多くの示唆を与えてくれる実験的試みである。

参考文献

- 青木秀男, 2010, 「はじめに」『ホームレス・スタディーズ——排除と包摂のリアリティ』ミネルヴァ書房, i-v.
- 赤坂憲雄, 1991, 『新編 排除の現象学』筑摩書房.
- 阿部彩, 2009, 「誰が路上に残ったか」『季刊社会保障研究』45 (2): 134-144.
- , 2011, 『弱者の居場所がない社会』講談社現代新書.
- Becker, S., Howard, 1963, *Outsiders*. New York: Free Press. (村上直之訳, 1978, 『アウトサイダーズ——ラベリング理論とはなにか』新泉社.)
- ビッグイシュー基金, 2010, 『若者ホームレス白書』.
- , 2019a, 「ビッグイシュー基金とは」, ビッグイシュー基金ホームページ, (2019年12月1日取得, <https://bigissue.or.jp/about>).
- , 2019b, 「ホームレス問題の現状」, ビッグイシュー基金ホームページ, (2019年12月1日取得, <https://bigissue.or.jp/homeless>).
- ビッグイシュー販売者, 2011, 『世界一あたたかい人生相談』講談社文庫.
- Das, V. and A. Kleinman, M. Lock, M. Ramphele, and P. Reynolds. eds., 2001, *Remaking World: Violence, Social Suffering, and Recovery*, University of California Press.
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構, 2019, 「図9 各年齢階級の正規、非正規別雇用者数」, (2019年12月1日取得, <https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/timeseries/html/g0209.html>).
- Haffpost, 2016, 「日本の貧困は『降格する貧困』に近づいている。セルジュ・ポーガム『貧困の基本形態』講演から」, (2019年12月1日取得, https://www.huffingtonpost.jp/hiroki-mochizuki/japan-deprivation_b_12614230.html).
- 稗田和博, 2007, 『ビッグイシュー 突破する人びと——社会的企業としての挑戦』大月書店.
- 樋口明彦, 2004, 「現代社会における社会的排除のメカニズム」『社会学評論』55 (1): 2-18.
- 平川茂, 2004, 「『路上の権利』と『見守りの支援』——野宿生活者中の〈逃避〉タイプのニーズ (必要) をめぐって——」『市大社会学』5: 53 - 67.
- 岩田正美, 2008, 『社会的排除——参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣.
- Jordan, Bill, 1998, *The New Politics of Welfare: Social Justice in a Global Context*, Sage Publication.
- 北川由紀彦, 2010, 「〈ホームレス〉と社会的排除——制度・施策との関連に注目して——」『理論と動態』3: 71-86.
- 加藤秀俊, 1953, 「身上相談の内容分析」『芽』思想の科学研究会編, 9 (10): 17-29.
- Lenoir, René, 1974, *Les Exclus: un Français sur dix*, Seuil.
- Lister, Ruth, 2000, "Strategies for Social Inclusion: Promoting Social Cohesion or Social Justice?", P. Askonas and A. Stewart (eds.), *Social Inclusion: Possibilities and Tensions*, Macmillan.
- , 2004, *Poverty*, Polity Press. (松本伊智朗監訳・立木勝訳, 2011, 『貧困とはなにか——概念・言説・ポリティクス』明石書店.)
- 宮本太郎, 2013, 『社会的包摂の政治学——自立と承認をめぐる政治対抗』ミネルヴァ書房.
- 内藤直樹・山北輝裕編, 2014, 『社会的包摂 / 排除の人類学——開発・難民・福祉』昭和堂.
- 中村健吾, 2002, 「EUにおける『社会的排除』への取り組み」, 『海外社会保障研究』141 :56 - 66.
- Paugam, Serge, 2005, *Les formes élémentaires de la pauvreté*, Le Lien Sociale (川野英二・中條健志訳, 2016, 『貧困の基本形態——社会的紐帯の社会学』新泉社.)
- Stoleru, Lionel, 1974, *Vaincre la pauvreté dans les pays riches*, Flammarion (益戸欽也・小池一雄訳, 1981, 『富める国の貧困 社会的公正とは何か』サイマル出版会.)
- 鈴木亘, 2008, 「ホームレス対策と生活保護」阿部彩・國枝重樹・鈴木亘・林正義『生活保護の経済分析』東京大学出版会.
- 堤圭史郎, 2010, 「序章——ホームレス・スタディーズへの招待」『ホームレス・スタディーズ——排除と包摂のリアリティ』ミネルヴァ書房, 1-29.
- 山田社志郎, 2003, 「ホームレス対策の3つのアプローチ——『就労自立アプローチ』への傾斜とその限界

- 性——」『社会福祉学』44 (2): 24-33.
- 矢崎千華, 2013, 「紙上『身の上相談』を分析する社会学的視点: 社会的構築主義からの批判的検討」『KG 社会学批評』(2): 31-38.
- Young, Jock, 1999, *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*, Sage (青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂訳, 2007, 『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版.)
- 有限会社ビッグイシュー日本, 2017, 「ビッグイシュー日本版媒体資料」, 有限会社ビッグイシュー日本ホームページ, (2019年12月1日取得, https://www.bigissue.jp/wp-content/uploads/2017/11/about_bigissue17.pdf).
- , 2019, 「ビッグイシュー日本とは」, 有限会社ビッグイシュー日本ホームページ, (2019年12月1日取得, <https://www.bigissue.jp/about>).

(やくわ かよこ・博士後期課程)

A New Approach to Social Inclusion: The Case of The Big Issue Japan

Kayoko YAKUWA

While the concept of social inclusion has been widely discussed in the academic arena, sociologists such as Ruth Lister have pointed out several associated dilemmas. Modern society is prone to value people according to their contribution to industrial society, and schemes of social inclusion often reflect this. They try to redirect excluded people back into society via some “remedy” or “treatment.”

This paper explores another possible means of achieving social inclusion, by examining the case of The Big Issue Japan. By tracing the transformation of the measures of social inclusion practiced for the street magazine vendors, the author tries to identify the elements needed to bring about significant changes.

First, this paper reviews the literature related to social inclusion and examines the Japanese policy of *Jiritsu-Shien-ho*, a law aiming to enhance the self-support of homeless people, enacted by the Ministry of Health, Labour and Welfare in 2002.

Second, it traces the transformations in social inclusion practiced by The Big Issue Japan by examining its magazine content and organizational outlines.

Third, three of the homeless people who act as street vendors for the magazine were interviewed to investigate how their daily practices helped broaden the range of social inclusion possibilities available.

In the last chapter, the author investigates how the social inclusion plan embodied by The Big Issue Japan has been transformed under the influence of the decisions made by the organization, the daily practices of the vendors themselves, and by the prevailing social structure.